

Interview

駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第30回 パラグアイ

ラウル・アルベルト・フロレンティン＝
アントラ駐日パラグアイ大使

今年は日本パラグアイ 外交関係樹立 100 周年

ー 日本とのさらなる関係強化を期待 ー



パラグアイ共和国のフロレンティン＝アントラ駐日パラグアイ大使は、ラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、パラグアイの経済発展と良好な投資環境、今年外交関係樹立 100 周年を迎えた日本との関係等について見解を表明した。同大使は、駐独大使、商工省投資・輸出総局長、外務省儀典長を歴任し、2017 年 12 月から駐日大使。

インタビューの一問一答は次の通り。

日本の印象

一大使は日本に着任されて約1年になりますが、日本についてどのような印象をお持ちですか。これまでの日本滞中で最も印象深い思いでは？

大使 私の日本の印象は、清潔、秩序、規律、時間厳守といった海外における日本のイメージと重なります。この一年間、これらの素晴らしい美徳を体感することができました。また、日本の公的機関や民間セクターがオープンかつ友好的な姿勢で対応して頂いたおかげで、円滑に日本に適応し、対話や事業を意欲的に進めることができたと思っています。

首都アスンシオンの発展は好調な経済を反映

ー最近、首都アスンシオンを訪問した人々は、その急速な発展ぶりに目を見張りますが、その原動力は何でしょうか。

大使 最近の首都アスンシオン（近郊を含めると全人口の4分の1が集中）は、経済が南米で最も安定的

に成長しているパラグアイの姿を反映しています。パラグアイ経済が好調なのは約15年前から適切な経済財政政策が行われてきたからです。過去10年間の平均経済成長率は4.4%、2018年も4.5%と見込まれています。インフレ率は4.5%程度で、通貨価値も安定し、外貨準備も十分にあり、経済成長に相応しい状況にあります。国際機関や格付け機関から、パラグアイの経済は強固で投資環境も良好との評価を得ていることもあり、外国投資は最近10年間で約3倍増加しました。好調な経済を反映し、アスンシオンはオフィスビル、住宅、ショッピングモール、レストラン等が次々と建設され、これまでにないテンポで発展を遂げています。このような発展を下支えするものとして「国家開発計画パラグアイ2030」（2014年採択）があり、①貧困削減と社会開発、②包摂的な経済成長、③国際社会への参画を3本柱とする不断の政策努力が行われています。

財政規律強化が外国投資誘致の第一歩

—カルテス政権（2013年8月～18年8月）は、従来の経済政策をよりビジネス・フレンドリーな形で集大成し、外国投資と経済成長を促進したと聞いていますが、具体的にはどのような政策を採ったのでしょうか。

大使 最も重要かつ効果的な政策は、カルテス政権の最初の年に可決された「財政責任法」（財政赤字をGDP 1.5%以内に制限）です。これによりマクロ経済運営の規律、透明性、予見可能性が高まり、パラグアイ経済に対する内外の信認を高めることになりました。第2はインフラ投資の増大です。カルテス政権以前のインフラ投資は年間3億米ドル以下でしたが、同政権下で年々増加し2017年には8億ドルに達するとともに、「官民パートナーシップ法」導入により民間企業の公共インフラ事業への参入が可能になりました。第3はカルロス・アントニオ・ロペス奨学金制度です。この政策により経済成長の原動力である人材の育成と教育の向上が図られました。第4は既に存在していた「保税加工制度（マキラ）」の強化です。マキラ制度の下で生産する輸出企業は、付加価値税1%が唯一の税負担となります。また、「トリブル10」（付加価値税10%・法人税10%・個人所得税10%）と呼ばれる税制は外国投資家にとっても魅力的なものです。

若手新大統領はマクロ経済の安定を重視

—2018年4月の大統領選挙で与党コロラド党のマリオ・アブド・ベニテス候補が勝利し、同8月大統領に就任しました。新大統領はどのような人物ですか。また、政策的な優先課題は何でしょうか。

大使 大統領選挙で与党コロラド党のベニテス候補が野党のエフライン・アレグレ候補を破り、初代ロペス大統領（1844～1862年）から数えて50代目、民主化後第9代目の大統領に就任しました。ベニテス大統領は47歳です。ベニテス政権の優先課題は、経済発展を軸にしつつ、国民の健康・衛生、教育の充実、民主主義の強化です。経済分野については、ベニテス大統領は、財政規律の強化や透明性の高い通貨政策を通じマクロ経済の安定性と予見可能性を高めると強調しています。パラグアイを南米の工業ロジスティクスセンターにすることを目指し、外国投資を誘致するため、法的安定性の強化、若年労働者の活用、官民パートナーシップの促進、貿易投資協定の拡充等を図るとともに、中小零細企業や小規模農

業者の支援にも努力しています。教育分野については、初等教育、職業訓練、高等教育、スポーツ教育等を重視しており、教育予算をGDP 7%とすることを目指しています。健康・衛生分野については、プライマリーケアや母子保健を重視し、地域ごとの医療体制の整備を図ることにしています。民主主義の強化のために、抜本的な汚職撲滅対策を取るとともに、組織犯罪や麻薬組織の摘発にも努めています。

ブラジル・アルゼンチンとの友好協力は不変

—パラグアイにとって隣国ブラジル及びアルゼンチンとの関係は極めて重要だと思いますが、両国との関係において貴国が重視していることは何ですか。また、メルコスールに懐疑的な発言をしているボルソナロ大統領の誕生によりブラジルとの関係に変化が生じると考えますか。

大使 パラグアイはブラジル、アルゼンチン、ウルグアイとともにメルコスールの創設メンバーであり、これらの国々との関係はパラグアイにとって極めて重要です。特に、ブラジルは、パラグアイの輸出の34%、輸入の25%を占めている最も重要な貿易相手国です。パラグアイ東部には大きなブラジル人コミュニティがあり、農業生産に大きく貢献しています。また、多くのブラジル企業が進出しており、パラグアイがブラジルの生産サプライチェーンの一部になる形で両国間の経済統合が進んでいます。世界最大級のイタイプ水力発電所の存在も重要です。同発電所はアルゼンチンとのヤシレタ発電所とともに、パラグアイを世界最大の電力輸出国にしています。また、アルゼンチンはパラグアイの輸出の28%、輸入の18%を占めるブラジルに次ぐ重要な貿易相手国です。パラグアイ経済の持続的な成長にともなって、アルゼンチン企業による建設投資やフランチャイズチェーンの出店が相次ぎ、アルゼンチンの存在感が高まっています。

ボルソナロ新ブラジル大統領は就任前にベニテス大統領と会談し、友好的な雰囲気の中で、それぞれの国民の利益のために協力することを確認しました。両国間の絆は極めて強く、いずれの国にとってもその変更は望ましくありません。

最近の欧州の状況はEPA交渉に影響しない

—大使は駐独大使をされた欧州情勢にも明るい方ですが、欧州が移民問題、内政不安、英国離脱などに揺れる中で、EU・メルコスール間のEPA交渉の早期妥結は可能だと

いますか。

大使 ご指摘の欧州の状況は、メルコスールとのEPA交渉に直接的な影響はないと思います。交渉が難航しているのは、農業分野等で合意が得られていないためです。双方とも早期に合意したいと考えていますが、EPAは物品の市場アクセスだけでなく、政府調達や知的財産権など幅広い政策分野を含むため複雑な交渉となっています。メルコスールとEUは伝統的な良好な関係にあり、EPAが合意に至れば関係は一層深まるとともに、自由貿易体制の強化にも資すると思います。

台湾との友好協力関係は揺るがない

—パラグアイは台湾と外交関係を維持している中南米でも数少ない国の一つですが、今後とも台湾との関係を維持しますか。

大使 パラグアイと台湾は緊密でダイナミックな関係を維持しています。2017年には外交関係樹立60周年を祝賀し、様々な記念行事や文化事業が行われました。ベニテス大統領は、パラグアイの外交方針として経済的利害よりも原理原則を重視すると述べ、台湾の国連機関への加盟申請を支持すると表明しました。台湾はパラグアイの経済開発に多大な協力をしてきた国の一つであり、国民の間にも敬意と感謝の念があります。昨年、「パラグアイ・台湾ポリテクニコ大学」が創設され、今後10年間で1,500人の世界レベルの技術者の育成が見込まれています。

安倍総理訪問で外交関係100周年がスタート

—2019年は日本・パラグアイ外交関係樹立100周年に当たりますが、要人往来や記念事業等の計画はありますか。

大使 昨年12月2日、安倍総理大臣が日本の総理として初めてパラグアイを公式訪問し、ベニテス大統領と会談しました。これは長年にわたる両国関係の強化を象徴するものです。

安倍総理の訪問は2019年の外交関係樹立100周年事業のキックオフとなり、両首脳は両国で公募し選考された日本人デザイナー作成の記念ロゴを公表しました。

我々駐日大使館も様々な文化行事を企画しています。世界的に有名なギタリスト・ベルタ・ロハスのコンサートが東京等で開催される他、パラグアイ・コミュニティによる「パラグアイ フェスティバル」も今年はより大きな規模で開催される予定です。ま

た、投資誘致のための使節団や公式記念行事のためのハイレベルの要人の訪日も期待されています。



安倍総理とベニテス大統領（2018年12月18日 提供：内閣広報室）

農業開発における日本人移住者とJICAの貢献は大きい

—パラグアイは大豆の輸出量が世界4位、牛肉が世界8位を誇る農業大国になっていますが、このような成功の背景には日本人移住者の貢献や日本の援助があったと聞いていますが、そうでしょうか。

大使 現在の農産物輸出国としての成功は、長年にわたる品質向上と増産のための努力が結実したものです。特に、1970年代の国民や移住者の努力が農業大国となる原動力となりました。その過程で日本人移住者やその子弟は重要な役割を果たしました。「直播」技術の導入により大豆など新しい作目の拡大に貢献し、南部（ピラポ）や西部（イグアス）の日本人移住地はその生産拠点になっています。また、農業の拡大と近代化には、日本、ドイツ、台湾等からの国際協力も貢献しました。国際協力機構（JICA）は農業の機械化、新品種の研究、森林開発、インフラ整備等に協力してくれました。

最近6年間で進出日本企業数が2倍に

—近年、パラグアイには造船や自動車部品の分野で日本企業が積極的に進出していますが、日・パラグアイ間の経済関係の現状と今後の展望を教えてください。

大使 パラグアイは、政治・経済の安定性、外国投資誘致策、良好なビジネス環境等から、メルコスール市場を睨んだ生産拠点として大きな潜在力があると多くの外国企業から認知されています。その中には名の通った日本企業（常石造船、フジクラ、矢崎総業、住友電装など）も含まれており、最近6年間で進出日本企業数は2倍に増加しましたが、今後さら

に多くの進出を期待しています。特に、自動車関連産業は有望です。現在ブラジルと交渉中している自動車分野の協定が合意されると、パラグアイで部品を製造しメルコスール域内の自動車工場に供給する事業はより魅力的なものになります。パラグアイ・パラナ両河川航路の開発が進むにつれて造船分野も有望です。知識経済に関連する分野でも可能性が広がっています。

3国国境地帯は魅力的な観光地

―パラグアイにはイグアスの滝、アルパ、マテ茶、手芸品など日本人を惹きつけるものがたくさんありますが、観光、文化、芸術分野での交流の可能性をどうお考えですか。

大使 パラグアイの文化は日本でも広く受け入れられています。日本各地で数千人が「パラグアイ ハープ」を習っています。伝統的な刺繍織物「ニャンドゥティ」も数百人が学んでおり、日本語の教材も出版されています。また、観光については、パラグアイ・ブラジル・アルゼンチン3国国境地帯は自然の楽園であり、日本人観光客の関心を引き始めています。この地帯は豊かな動植物の宝庫であるだけでなく、壮大なイグアスの滝や巨大なイタイプ水力発電所、商業都市シウダデルエステ、日系人のイグ

アス移住地等があり、観光地としての魅力に富んでいます。愛好家が生産地を訪ねる「ニャンドゥティの道」という新しい観光パッケージも発表されました。

読者へのメッセージ

―『ラテンアメリカ時報』の読者に対しメッセージがあれば、お願いします。

大使 パラグアイと日本は外交関係を樹立してから100年、最初の日本人移住者がパラグアイに来てから80年という長い交流の歴史があります。この間、パラグアイにおける日本への関心や日本文化に対する愛着は年を追うごとに深まっています。パラグアイを訪れた多くの日本人もパラグアイが気に入り、長年の良き友人になってくれています。読者の皆様にもぜひパラグアイを訪れていただき、様々な魅力や人々の温かさに触れていただきたいと思います。また、日本企業の皆様にはパラグアイの良好な投資環境やメルコスールの生産拠点としての優位性について知っていただきたいと思います。駐日大使館は皆様からの照会をお待ちしています。

(ラテンアメリカ協会副会長 佐藤 悟)

ラテンアメリカ参考図書案内



『スペイン語で旅するおくのほそ道 SENDAS DE OKU』

伊藤 昌輝著 エレナ・ガジェゴ・アンドラダ監修 大盛堂書房
2018年11月 239頁 1,800円+税 ISBN978-4-88463-122-2

俳句は江戸時代には俳諧と呼ばれ、連歌形式を一変させた松尾芭蕉(1644～94年)は生涯を漂泊者として送り4編の紀行文を遺しているが、本書の最後の旅の終わった後も推敲を重ねて死の直前に仕上げたのが『おくのほそ道』である。極めて簡潔な文章で書かれているが格調が高く、短い文章の中に濃密な情感が凝縮されており、日本古典文学を代表する傑作の一つとされている。

元禄2年(1689年)2月の江戸出立から日光、那須、白河を経て仙台、石巻、平泉まで北上し、出羽に出て越後、越中、越前を回って美濃の大垣に9月初めに到達するまでに綴った旅の様子とその折々に詠んだ句の原文と現代語訳、そのスペイン語訳文と注記を、様々な江戸期の画像、旅程図、松尾芭蕉年譜などとともに分かりやすく両国語で載せている。

同じ出版社からバイリンガル書籍として『スペイン語で奏でる方丈記』、『スペイン語で詠う小倉百人一首』、『スペイン語で親しむ石川啄木 一握の砂』の著作もある著者ならではの、日本語、日本文学とスペイン語に通暁した高い見識があってこそその素晴らしい労作である。

(桜井 敏浩)